ミク～忘れられない記憶～

瀬戸　空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミク～忘れられない記憶～

【Ｎコード】
Ｎ３８４９Ｑ

【作者名】
瀬戸　空

【あらすじ】
幼い頃から孤児院で寂しく育てられた空。父親に見捨てられた大野和馬。父と母を黒ずくめの男に殺された丸宮一太。彼らの共通点は、孤独ということだった。そして、空の前に現れる、金髪の美少女ミク。彼女はいう、助けに来てと、、、。さらに、和馬と一太の前に現れる青年ジーク。彼は二人を誘う。そして三人は出会い、異世界への扉は開かれる。異世界とは、「思念世界」と呼ばれる世界であり、いわゆる夢の世界だった。夢の世界で和馬と他の二人は離れ離れになってしまう。そして、明かされていく世界の真実。狭

間の世界の存在。ミクの居場所。三人が選ばれたわけ。ジークの正体。神の存在。

今、伝説が始まる。

プロローグ

瀬戸空は夢をみた。その夢は、いつもよりもずっと深く、現実味のある夢だった。

舞い降る雪の中で、自分を笑いながら見ている金色の髪の少女。彼女ほど美しい少女は空は見たことがなかった。彼女はまぶしい笑顔で空を見つめていた。

とたんに視界が変わる。夢が変わったのだ。

空は天高く空から落ちていた。空は叫んだ。しかし、声は天に飲み込まれたように、一切、聞こえなかった。ぐんぐんと地上が近づいてきた。空は目を閉じた。　すると、どういうことだろうか、空の体はふんわりと浮いたような感じがした。いったい、なんなんだ？

空は目を見開いた。今度は海の中にいた。

空は驚き、唖然としてしまった。海の中はとてもこわかったが、それと同じくらい美しかった。

空には自分が夢を見ていることに気づいていた。しかし、あまりにも現実味のあり過ぎる夢でど肝を抜かれていた。

そして、次の瞬間には空は真っ白だけな部屋にいた。自分以外、誰もいない部屋だった。しかし、空にはわかった。自分以外の誰かがいることを、、、

「誰だっ！」空は唸った。

しかし、声は返ってこない。

「出て来い！」空はもう一度、今度は大きく叫んだ。

静かに、真っ白な部屋に霧が立ちこみ始めた。やがて、それは部屋を覆い隠した。それと同時に、霧の向こうに人の影が浮かび上がった。

「まったく、君には驚かされるよ」人の影がゆっくりと澄んだ声でいった。どうやら、相手は青年らしい。

「お前は誰だ！」

空は警戒を解かなかった。夢の中といえ、怖いものは怖いのだから。
「まぁまぁ。僕は悪いやつじゃないよ。少なくとも、今はね」
「お前は誰だ？」空は少しだけ、声を落ち着かせて聞いた。
「誰だろうね？」

どうやら、青年は真面目に答える気はないらしい。

それにしてもおかしい。これは、僕の夢だ。なのになんで、僕の思うように話が進まないんだ？　まさか、夢じゃないのか？
「これは、夢なのか？」
不思議にも、空は正体不明の青年に聞いてしまった？
「君にとっては夢なのかもしれない。でも、僕にとっては夢じゃない」
聞けば聞くほど、空は迷宮入りしてしまった。
「ちゃんと答えろよ」空は八つ当たりのように、青年にいった。
ふっ。と青年は笑った。「答えを見つけるには、早過ぎないかな？」
空には彼のいっていることが全く意味がわからなかった。
「君はなぜ、旅をする？」
青年が急に聞いてきた。なぜ、旅をする？　空自身もよくわかっていない。なぜ、僕は旅をしているのだろう？
「なんで、、、そんなことを」空はうろたえた。
「君は一人だ。だから、君は選ばれたんだ」
「どういうこと？」

青年が一歩、空に向かって前進した。一瞬、青年の顔が見えた。
それは、美しい顔だった。
「君は夢を信じているか？」
青年の静かな声は、何度も部屋に響いた。

夢を信じる？　確かに空は自分が幾度も見る夢は好きだったが、信じるということの意味がわからなかった。
「君は夢を信じているか？」
再び、部屋に青年の声が響いた。
空は意味がわからなかった。しかし、自分の意思とは関係なく、うなずいていた。まるで、もう一人の自分がそうにしたかのように、、、。
「それなら、僕は海の向こうで待っているよ。君と本当に会えるのをまっているさ」
空の視界はだんだんと、ぼやけてきた。いや、違う。白い霧がだんだんと空の視界を遮ってきているのだ。
「ま、、待って！！」
空は叫んだが、もう、青年の影は消えていた。やがて、空は深い眠りに落ちた。

その頃、瀬戸空と同じように夢を見ている少年がいた。しかし、空と大きく違う点は、彼の夢はとてもぼんやりとしていて、虚ろだったからだ。
少年はもうずっと昔に崩されたはずの住んでいた家の中にいた。何も考えられない。頭がとても痛い。
突然、一階の玄関から聞きなれている父さんの悲鳴が聞こえてきた。
少年は急いで一階の玄関に向かった。そこには、全身、黒い黒ずくめの男がいた。
黒ずくめの男と少年の父は大きな声で怒鳴りあいをしていた。その言葉は少年には聞こえない。父さんと黒ずくめの男に少年はかなり近ずいていたはずだったのだが、声は聞こえなかった。
黒ずくめの男は懐から長い包丁を取り出した。それでも、父さんは動じなかった。
少年は、その光景をただぼんやりと虚ろに見ているだけだった。

何かいわなくてはならないのだろうけれど、なにも考えられなかった。
後ろから母さんが現れた。母さんは一人のまだ幼い子供を抱きかかえ2階へ上がろうとしていた。そうだ。あれは僕だ。そして、母さんは2階に上がって警察に通報しようとしているんだ。だって、電話は2階にしかないのだから。

少年にとってはこの夢はすごくゆっくりとしたペースで見えていた。おかしい。とっても怖いはずの夢が、なんだか楽しい夢に見えてきた。
黒ずくめの男がなにかを吼えた。そして、父さんを、その長い包丁で貫いた。
「に、、、にげろぉ！」
少年には父さんの最後の声が聞こえた。
少年はいっきに恐ろしさが増して、2階へと逃げた。黒ずくめの男も後を追ってくる。怖い。怖すぎる。
そして少年は家にたった一つだけ電話がある部屋に逃げ込んだ。今さら思うと、なぜ家に一つだけしか電話を置いていなかったのだろう？
母さんも幼い頃の自分もそこにはいた。
母さんは受話器を必死に持ちながら何かを叫んでいた。あぁ。駄目だよ母さん。そこにいたら殺されてしまう。
すぅー。と一瞬だけ少年の体は透けて、そこを黒ずくめの男が通った。
黒ずくめの男は母さんを長い刃物で背中から貫いた。母さんは一瞬で死んだ。
黒ずくめの男はふぅー。とため息をついた。それから、母さんに抱かれながら怯えて声を失った幼い頃の自分がいることに気がついた。
黒ずくめの男は母さんを邪魔そうに足で蹴り上げた。これで、幼

い頃の自分は無防備になった。
黒ずくめの男はぞろぞろと幼い頃の自分に近づく。
その時、一瞬だけ黒いフードの中に隠れた顔が見えた。金色の髪と威厳に満ちた表情の中年の男だった。そして、あろうことか彼は泣いていた。泣きながら幼い頃の自分をを見ていた。
「俺を恨むまないでくれ。しょうがないのだ。光を守るためには、犠牲も必要なのだ。わかってくれ」
そういうと、黒ずくめの男は一階に下りていき、やがて玄関の閉まる音がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3849q/

ミク～忘れられない記憶～

2011年1月24日17時40分発行